

ヨハネの福音書 19 章 1～16 節「この人を見よ」

福音書にはイエス様の生涯のことが記されています。でも、偉人の伝記とは違います。イエス様が救い主であることが証言され、イエス様によって与えられる救いがどのようなものであるかが伝えられているのです。

ユダヤ人の指導者たちは、夜が明けると彼らはイエス様をローマ総督ピラトの官邸に連れて行きました。イエス様を十字架刑にするためです。ピラトは面倒なことに巻き込まれてしまいました。その中でも彼は、妬みに駆られた指導者たちのことばよりも、イエス様のことばに真実であることを感じたのではないのでしょうか。イエス様を釈放しようとしています。

1 見よ、この人だ (19 : 1～6)

・鞭打ち、辱めた

ピラトはイエス様を鞭打ちにします。鞭が当たるたびに金属が体に刺さり、引き裂くという残酷な刑でした。また、ローマ兵たちはイエス様を辱めます。ユダヤ人の王と主張したという訴えだったので、イエス様に茨の冠をかぶらせ、紫色の衣を着せ、王様の姿に見立てて、近寄って「ユダヤ人の王様、万歳」と言いながら、顔を平手でたたき、からかいばかにします。

ユダヤ人たちの前に出て来たイエス様の姿は、哀れな様子で、人が顔を背けるような状態でした。そして、ピラトは「見よ、この人だ」と言います。つまり、あなたがたが訴えている男は、こんな惨めな者だ、ローマに反逆できるような者ではないことが分かっただろうというのです。

これでユダヤ人たちも納得するだろうとピラトは考えたのです。ところが、かえってユダヤ人たちは口々に「十字架につけろ。十字架につけろ」と叫びます。

・この人に罪を見出せない

ピラトは「私にはこの人に罪を見出せない」と繰り返して言います。イエス様を死刑にする理由がないことを、ピラトがはっきりと認めていたことが分かります。

罪のないイエス様が痛めつけられ、辱められたお姿を思う時に、イザヤ書 53 章の苦難のしもべについてのみことばを思い起こします。イザヤ 53 章 3 節には「彼は蔑まれ…人が顔を背けるほど蔑まれ」とあります。7 節には「彼は痛めつけられ、苦しんだ。たが、口を開かない」とあります。まさにローマ兵によって痛めつけられ、蔑まれたイエス様のことが預言されていました。

そして、10 節にあるように、イエス様が痛めつけられ、蔑まれることは、「主のみこころ」でした。イエス様をご自分のいのちを「代償のささげ物とする」ことで、主のみこころは成し遂げられたのです。それは私たちの救いのためでした。5 節にあるように、イエス様が身代わりとなって裁きを受けてくださったゆえに、私たちに平安と癒し、救いが与えられることが成し遂げられたのです。

イエス様の姿を直接見ていたユダヤ人たちは、このことが分かりませんでした。しかし、私たちには、聖書によって明らかにされています。それに対して私たちはどういう態度をとるのでしょうか。

2 ますます恐れを覚えた (19 : 7～11)

・自分を神の子とした

ユダヤ人の指導者たちは、律法によればイエスは明らかに死罪に定められると言います。それ

は「自分を神の子とした」からです。「ピラトは、このことばを聞くと、ますます恐れを覚えた」とあります。ピラトはイエス様に「あなたはどこから来たのか」と尋ねますが、イエス様は何もお答えになりません。

・上から与えられていなければ…何の権威もありません

ピラトはいらだったのか、「私に話さないのか。私にはあなたを釈放する権威があり、十字架につける権威もあることを、知らないのか」と脅すように言います。するとイエス様は言われます。

「上から与えられていなければ…何の権威もありません」、

自分の人生は自分次第だと思っているかもしれません。自分の判断次第、努力次第で、決められると思っているかもしれません。そのような者には主はお語りになりません。私たちは神様が主権者であることを認め、そのお方の前にへりくだらなければなりません。主権者である神様の御手の中にあることをいつも認めているか、私たちは様々なことにおいて問われるのです。

3 イエスを引き渡した (19:12~16)

・釈放するなら…カエサルの友ではありません

ピラトはここまでは、イエス様を釈放しようと努力して来ましたが、けれども、その自分の判断を貫けなくなっていくます。ユダヤ人たちは脅しにも似たことを言います。イエスを釈放するのなら、カエサルの友ではない、自分を王とする者、カエサルの敵を釈放して、自分もカエサルに背くのかと迫ります。自分の総督としての立場を守れるかどうかの判断となります。ピラトは裁判の席に着きました。

・みこころの成就へ

祭司長たちは「カエサルのほかには、私たちに王はありません」と言います。イエス様に対する怒りに満たされ、自分たちの思い通りに事態を動かそうと、信仰に反することを簡単に言ってしまうのです。人の罪の大きさを思います。

ピラトはイエス様の十字架刑を認め、引き渡します。彼はイエス様の無罪を認めていましたが、自分の政治生命のため、自分の立場を守るために、小さな良心の声を無視して、ユダヤ人たちの叫び声に従ったのです。人の弱さを思います。

しかし、人々の罪によってイエス様は十字架につけられるのですが、そのことは神様のみこころでした。ピラトはユダヤ人の前に惨めな姿のイエス様を連れ出し、「見よ、この人だ」と言いました。しかし、それと全く違う意味でヨハネは、福音書を通して、イエス様の生涯と十字架と復活を証言し、「見よ、この人だ」と言っているのです。

結論

賛美歌「まぶねのなかに」の歌詞も同じことを語っています。1節から3節まで、イエス様の生涯と十字架のことを歌い、節の最後に「この人を見よ」と繰り返します。そして、最後の4節で「この人を見よ、この人こそ、人となりたる活ける神なれ」と信仰を告白します。

皆さんは聖書のみことばによってイエス様を見て、イエス様のことをどのような方であると受けとめるでしょうか。「この人こそ、人となりたる 活ける神なれ」と信じて、受け入れますように、主が信仰を与え、導いてくださいますように、お祈りします。イエス様を信じるなら、罪を赦していただき、永遠のいのちに生きることができるようになるのです。